

# 草の芽句会だより

NO,105  
29,5,18

謡本に祖父の筆跡春長けて  
新緑へバッグの中身入れ替えて

文子

み仏と分けて戴く豆の飯  
指折りて一人句作り日向ぼこ

貞

若葉風先生も園児も赤ぼうし  
そら豆を畑に入り貰ひけり

範子

勢よく伸びくる葛や城の道

純子

草相撲太さそろえて引き合いぬ

さいはての駅に小さき山桜

禮子

薫風やアイヌの社海に向く

濠浴いに桜若葉や通学路

剋子

城門に見上ぐ五月の空眩し

薙刀の女子さつそうと夏来たる

節子

黄帽子の集団下校麦熟るる

どんよりと黄砂の空や燕飛ぶ

貞子

島々の遠く近くに春霞

木々の間を見え隠れして夏の蝶

芳子

若葉燃ゆ大楠拌み遍路行く

出席者 大黒 真鍋 吉崎 森 馬場 小山  
投句者 川原 小林 氏家



五月晴れである。大手門には葉桜の影が揺れ、新緑に包まれた城山は空気が澄みきって木々のエナルギーが感じられる。花の時期もいけれど、新緑のこんな城山も大好きである。見返り坂で旅行者らしき三人の若者と出会う。「こんにちは」の挨拶も爽やか。「今気付いたんやけど、若者には新緑が似合うなあ」「爽やかさがあるわな。イケメンは特に似合うで」「私も昔は・・・」 久し振りに出席できた人もいて、お喋りが尽きない。「やっぱり出てきて皆と喋ると自分が生々しくくるみたい」「元気で生きていくためには、お喋りは不可欠なんやて。テレビで大学のえらい先生が言ったよ」 それならば少々自信がある私たち。未来は明るいの？